

桜

東京 三杉 和子



桜の魅力と言えば、一般的にはさまざまな色、形で咲く花にあるだろう。樹齢では代表的なソメイヨシノは一〇〇年と言われているが、日本の三大桜のエドヒガンザクラは、一〇〇〇年を超えて生きている。福島県の三春滝桜、山梨県の山高神代桜、岐阜県の根谷村淡墨桜、その凄さ、美しさ。

日本の花と言われる桜、一月に沖縄で見た紅色の桜。二月頃から三月へ、河津

の濃桃色の桜。そして四月、砧公園でも、綿帳のように芝生まで届く、淡い色の桜、遅れて八重の桜と、次第に日本列島を春が移動する。六月の北海道では、小花の桜と出会えた。九月を除く一年間、日本全国、それぞれの地で、親しんだ桜が咲いていく。人々の心をときめかせ、又、特別なひとときを作りながら。

松尾芭蕉の句「さまざまのこと思い出させる桜かな」がぴたり合う。

三分咲き、五分咲き、そして満開。又、夜の桜、ライトアップされた桜、異なる色を見せ、やがて桜吹雪があたり一面を桜色に染める。

その後には、桜しぶ散り、若草の上に濃赤の絨毯が敷かれる。そして、葉桜へと時が進むと、桜の存在は周囲の緑の中に馴染んでとけ込んでしまう。

七月、桜の緑葉で紺布を染めてみた。我家の桜は、濃黄と金茶を媒染の違いで発色した。これが十月頃になると、赤味が強く染め上げる。これも桜の持つ色だ。ジユウガツザクラがこの頃から咲き、カンザクラと一緒に、冬、人々を驚かす。

そして、秋、緑葉は黄葉になるもの、赤く紅葉するもの、一枚いちまいの葉が自由自在に自分色に染つて美しい。ここで又、桜の見事な自己主張の時期となる。春の桜の幹との対比と又異なる味わいが見られる。

大きさに似合わない太い枝を、四方に自由に伸ばし広がる。空に張り、地に向う。その根は大地を掴み、土を盛り上げて力強い。私は、そのような桜の姿に感動して描いている。



▲ 第61回示現会展 早春の桜 120号



▶ 砧ファミリーパーク桜林

待つ。そして、小さな蕾が枝に見え始めた頃の桜の枝を使っての染めは、なんと、開花した花を思わせるサクラ色になる。自然の力の不思議と思う。

ある年、一日中、開花間近の桜たちを見めて歩いた。枝の先是大きく膨らみ、枝の色から真紅の蕾色となり、樹全体が霞んだようにほんやり透けている。枝のところどころに、白い小花が弾けて咲き、辺り一面充満するエネルギーを感じていた。花期の異なる桜樹もあり、公園の沢山の桜木は、それぞれに春の仕度中だった。

夕方又、先の桜の前に戻ると、なんと、もう一面に白い桜花が浮き上がり、鮮やかで軽やかな色合いに一変していた。感激の出会いに感謝の気持で、時の経つを忘れた。

今年もこの桜達が見られる幸わせを、しみじみ思う。そして、この桜がいつ迄もこのような素朴な環境の中で、輝いていて欲しいと願う。

世田谷区内に今、このような広い緑の空間を持っているのは、大変幸わせだと思う。その東京都立砧公園の簡単な沿革を調べた。

最初の計画としては、農地解放などで東京都は、二十キロ圏内に六ヶ所の空き地を作る事だった。

一九四〇年 砧大緑地として都市計画決定。その当時、八十一ヘクタールあつた。

ホール作り、十一年間続いた。

一九六六年 ファミリーパークとして

開園。人々が自由に遊んだり、散策できる場となつた。現在の敷地、四〇ヘクタールに サクラ、ウメ、ケヤキ、ヒマラヤスギなどの高木が一一〇〇〇本。オオムラサキツツジなどの低木四三〇〇〇株

と、一面に芝生が広がる。

敷地の中には、軟式野球場、小サッカーフィールド、アスレチック広場、それに、世田谷美術館がある。レストランも公園を借景として、居心地の良い所だ。

全体的に地形を活かしているので、起伏のある中に見渡す限りのみどりがある。その中にいると、深呼吸したくなる。季節の移ろいで花が咲くこと、実が成ること、紅葉することなどで、気付かなかつた木が存在感を現わす。同じ公園を歩いていても、異なる魅力や感動が味わえる。大きなバードサンクチュアリーの場所もあるが、一年中変わらないのは、公園のどこにいても様々な鳥たちの囁り、そして、人々の楽しんでいる姿である。その中に身をおきながら、年輪を経た大木と対峙して、無心に描くその時間の有難さを、つくづく感じている。

成城の地には、この他、小田急線成城学園前駅の街路樹として桜並木があり、野川沿いにも、両岸から枝が覆いかぶさるようにして、見事な桜並木が続く。四月上旬、是非、散歩コースにされたら良いと思つてゐる。

一九五五年 都営ゴルフ場として、九



▶ 成城学園前駅 桜並木



▶ 野川沿い遊歩道